



明治30年代の興福寺。右が仏殿の大雄宝殿、左が媽祖堂

(長崎外国語大所蔵)

## 興福寺の大雄宝殿と媽祖堂

写真に見る

1115年前の長崎

日露戦争時代

姫野 順一

□ 35 □

明治30年代に撮影された、日本最古の黄檗寺院である東明山興福寺（長崎市寺町64番地、現寺町4番32号）である。崇福寺、福濟寺と共に「長崎三福寺」の一つに数えられる。元和6（1620）年、キリシタ（1654）年には中国の往来の嫌疑を晴らしたため、唐僧真円により南京地方の船主に捐資を求めて創建された。通称南京寺。2代目の黙子如定は、

寛永11（1634）年に長崎最古の石橋である眼鏡橋を架けたことで知られている。9代目の竺翫までは唐人住職で、建物は資材を中国に求め、中国式に建築された。お経も唐音であった。承応3（1654）年には中国の黄檗山万福寺から隠元禪師を迎え、中国明清風

の黄檗文化全盛となった。右は仏殿の大雄宝殿である。木造本瓦葺き・重層・切妻造り。下層の軒先が長く、隅棟が反りあがるのは黄檗寺の特徴である。慶応元（1865）年に台風で大破したが、明治16（1883）年に再建され、戦前は国宝であった。原爆で傾いたが焼失を免れ、今は国の重要文化財に指定されている。

二層屋根の間には、隠元が書いた「大雄寶殿」の額が掛り、下層屋根の軒下には、清国初代領事の余撫が書いた「萬歳江山」の扁額が見える。構造を支えるケヤキの柱や、梁の垂木や壁には複雑な組み物や彩色された彫刻が施され、入り口の向拝は、航海安全のため持ち渡

つた小さな媽祖像を「菩薩揚げ」して、出航まで黄檗寺の媽祖堂に預けた。庭の松は見事に剪定され、背後にも大きな老松が見える。これらの松木はやがて枯死するが、堂前のソテツは今も健在である。

（長崎外国語大学長）

# 「黄檗文化」象徴の文化財



の長崎外国語大に  
アクセスできる  
ホームページの  
QRコード

随時掲載します